

## 技術ノート

—陽極酸化法による特殊金属表面への着色

|      |     |
|------|-----|
| 浜島 敬 | 005 |
|------|-----|

## 文産出過程の文法符号化に関する一考察

|      |     |
|------|-----|
| 井原浩子 | 025 |
|------|-----|

## 借用語から見た日本列島における言語接触： 日本語からアイヌ語へ

|      |     |
|------|-----|
| 大塚恵子 | 033 |
|------|-----|

## 都市風景論

その(4) 19世紀ポツダム水景庭園に表象された近代都市景観のイデオロギー

|       |     |
|-------|-----|
| 長谷川 章 | 043 |
|-------|-----|

## 母袋俊也 絵画 マトリックス

1987-2010 M1-M431

|      |     |
|------|-----|
| 母袋俊也 | 089 |
|------|-----|

浜島 敬

Takashi HAMAJIMA

## 技術ノート

——陽極酸化法による特殊金属表面への着色

アルミニウムなどの軽金属の着色については、工業的には近年かなりの進歩があり、アルミサッシ、ドア、玩具などに应用され、実用化されている。しかしその色は限られており、美術的な意味を持たせるのは容易ではない。

一方、チタンやニオブ、タンタルなどの特殊金属を、電解質溶液中で金属を陽極として加電することによって、より色彩的に変化に富んだ着色層が金属表面に現れることが知られてきた。それと共に、この方法を利用して特殊金属表面上に多少なりとも美術作品に近いものを表現することが可能となってきた。

電解質溶液中で金属表面上に層を生じさせる方法は、原理的には比較的単純である。反面、それを美術制作に応用するとなると、実験条件など細部についての十分な検討が必要であろう。

チタン、ニオブの陽極酸化による着色については、付加電圧によって表面に形成される酸化金属膜の厚さが決められ、その厚さに応じて独特の干渉色が現れると説明されている。また、付加電圧の他には金属の表面状態にも、表面の色は大きく依存しているようである。その他の諸々の条件も含めて、金属板上への美術的な着色の具体的な方法を探ってみた。

チタン板、チタン箔を主な試料として、いくつかの条件のもとで、着色実験を行った。細部にわたっての徹底的な実験は行えなかったが、確認したいくつかの点について「技術ノート」としてまとめたものである。

写真は、21～24頁のカラーページにまとめて再掲した。

井原浩子

# 文産出過程の文法符号化に関する一考察

An aspect of grammatical encoding in speech production

文を産出する過程には幾つかの段階があると考えられている。初めに伝えようとする内容があり、最後に実際の発話があるが、その途中の段階に文を組み立てる文法符号化 (grammatical encoding) と呼ばれる段階がある。文法符号化の過程にどのような処理が含まれているかについては言い誤りのデータや実験結果をもとに様々な研究が行われてきた。本稿では、標準モデルとしてしばしば紹介される (Ferreira and Engelhardt 2006; Ferreira and Slevc 2007他) 2段階モデルを中心に、Garrett (1975) から Franck et al. (2006) までの文法符号化に関する主要な研究を概観する。その上で、文法符号化は Vigliocco and Nicol (1998) が想定したように3段階、すなわち主語、目的語等の文法機能を与える機能付与の段階、それらの文法機能を反映する階層構造を段階的に構築する階層構造構築の段階、さらにそれらの要素を線状に配列する線状配列の段階、からなると考えるのが妥当であることを示す。さらに、著者が収集した日本語を母語とする健常者による自発話に見られる日本語助詞の言い誤りのうち、産出された動詞から考えた場合に「が」と言うべきところで「を」と言う言い誤りと、逆に「を」と言うべきところで「が」と言う言い誤りの2種類を取り上げ、それらはどの段階でどのように生じた可能性があるかを検討する。他動詞については、機能付与の段階で動詞が最終的に産出される動詞1つに決定されていると考えても、決定されていないと考えても、機能付与の段階または階層構造構築の段階で誤りが生じたとして説明することが可能である。一方、自動詞 (非対格動詞) の場合は、機能付与の段階で動詞が最終的に産出される動詞に決定されていたと考えると、「を」がどのように生じたかを説明することは難しい。むしろ、機能付与の段階では動詞は1つに絞られておらず、暫定的に他動詞が取る階層構造を構築し、その結果誤りが生じたと考えた方が説明として妥当であるように思われる。

大塚恵子

Keiko OTSUKA

借用語から見た日本列島における言語接触：  
日本語からアイヌ語へ

A Case of Language Contact in Loanwords: from Japanese to Ainu

近年の科学技術の進歩により、アフリカを出た人類の拡散、日本列島への人の移動などに関して様々な研究成果が報告されている。日本列島にはいくつもの方向から人が入って来たことが、従来にもまして明らかになりつつある。日本列島をめぐる史前の人々の移動については、分子生物学や人類学、考古学が、そして文献資料が存在する時代の人の移動については歴史学が多く情報を与えてくれる。それらが示唆するところは、日本列島の中へ、また日本列島の中で、幾度もの人の集団の移動があったということである。集団の移動があれば、異なる言語同士の接触や混交の可能性が出てくる。それが言語の多様性を生み出したり、時には単純化を引き起こしたりもする。日本列島に関してこれだけ言語接触の前提となる状況が見えていながら、言語接触を前提とした日本語史研究や方言研究は盛んではない。言語接触の視点から日本語の歴史的变化や方言の多様性、方言分布などを見直す必要がある。

ここでは、日本列島の二つの言語、アイヌ語と日本語の接触を、日本語からアイヌ語に入った借用語を通して検討する。事例は3点のアイヌ語・日本語辞典からとする。アイヌ語と日本語の音素体系を概観し、両者が異なっている点に注目して、対応する日本語とそれを受け入れた結果のアイヌ語を付き合わせ考察した。取り上げた語を整理すると、語頭と語中では異なる方法で受け入れられているのがわかる。語中では日本語（現代の共通語）にない鼻音が加わっている場合がある。

そうした事例を確認した上で、借用語の入ったルートを考察した。今も昔も方言差はあると考えられるが、日本のどの地域の方言の話者から借用語がもたらされたのであろうか。東北方言からという仮説と、近畿方言あるいは東北方言的特質を持たない他の方言からという仮説の二つをそれぞれ検討してみた。どの方言から入ったかによって上記の語中の鼻音の存在をどういう現象ととらえるかが違ってくる。この論文の段階で結論は出ないが、後者の仮説から興味深い推測ができることを示した。

長谷川 章  
AKIRA HASEGAWA

## 都市風景論

その(4) 19世紀ポツダム水景庭園に表象された近代都市景観のイデオロギー

Theory of urban landscape 4.  
Ideology of modern urban landscape symbolized in 19c. landscape gardens of Potsdam

本論は17世紀から19世紀にかけてのベルリン近郊の都市ポツダムの自然風景式庭園と同時代の絵画表現との関係に着目し、その都市の風景について論じたものである。ポツダムに着目した理由は、ドイツの内陸にありながら、ベルリンをはじめとする諸都市とは異なり、ハーヴェル湖という湖を中心とした非常に美しい水景の広がる、世界に類を見ない風景を容する都市であるからだ。しかもそれは純粋な自然風景ではなく、歴代のプロイセン国王が多彩な様式の建築物を点景として造り込んだ人工的な理想の風景である。

このポツダムのハーヴェル湖水景庭園の都市景観の分析は、自然風景式庭園が風景画を出自としていることを踏まえ、庭園の風景を18世紀の絵画表現の特性と比較検証することにより行われた。それは同時に幾何学式庭園の延長線上に位置付けられていた自然風景式庭園を、絵画表現の歴史的脈絡の中にあらためて位置付けることを意味している。

その結果ハーヴェル湖水景の都市の風景を分析することは、そのまま絵画表現に潜む近代のイデオロギーについて言及することを意味した。なぜならば風景画から自然風景式庭園が生まれた時代とは、近代芸術の萌芽が認められた時代であるからだ。すなわち、18世紀中葉とは、それまで低い評価でしかなかった感性の学問が理性の明晰な判断に比肩するものとして評価され美学という新たな概念が生み出された時代である。それは同時に古典的模倣芸術に代わり創造する源泉を芸術家の内部に求めるような自律した個人を前提とした近代芸術の理念が生まれた時代でもある。このように歴史的に18世紀とは近代社会を生み出す近代的個人の内部に創造の源泉をもとめる近代的な絵画表現が試みられた時代であり、絵画の領域では風景画が生まれ、その風景画を出自とした風景式庭園が造られ始めた時代である。以上を論じるために本論は大きく三部構成となっている。

第一部ではポツダムの都市が誕生し、やがて周囲に多くの庭園が形成され、最後にハーヴェル湖を中心とする水景庭園都市へと変貌する都市空間の歴史的経緯を詳述した。最後に庭園と絵画の密接な関係について述べた。

第二部では18世紀に生まれた感性の学としての美学の誕生の歴史を詳述し、18世紀という時代の芸術表現の特性を述べた。その特性とは美的イリュージョンによる感情移入をうながす絵画表現で

ある。それは16世紀までの古典的絵画が、19世紀中葉に誕生した近代芸術へと変貌を遂げる過渡期の時代である。この時代の絵画表現の特徴を持つ絵画作品をいくつか取り上げ、その具体的な表現について検証した。

第三部では近代直前の18世紀の文学と絵画と庭園の美的表現について述べる一方で、バロック芸術における関係性の美学の理念について述べた。そして19世紀初頭に形成されたハーヴェル湖水景の風景と、近代前夜の絵画表現の比較検証を行った。すなわち美的イリュージョンの表現として、具体的にハーヴェル湖の水景の分析を試みた。そしてその解釈の有効性を確認した。

以上のようにポツダムの都市の風景とは、近代芸術が誕生する前夜の過渡的な時代に生み出されたものであり、当時の絵画表現と同様に、そこには近代のイデオロギーが表象されている。すなわちそれは芸術の美的価値の自律を背景として、風景に意味を読み取るような「眼差し」を持つ近代的個人の自律の誕生を導いた近代のイデオロギーである。

母袋俊也  
Toshiya MOTAI

母袋俊也 絵画 マトリックス  
1987 - 2010 M1 - M431

MOTAI Toshiya MALEREI MATRIX  
1987-2010 M1-M431

## 目次

## 「母袋俊也 絵画 1987-2010 マトリックス M1-M431」

1. 絵画 1987-2010 インスタレーション・ビュー 8-20 風景にみる視線の双方向性 KY OB AS HI-OHME
2. 制作・理論研究 概念図 マトリックス
3. 絵画 クロノロジー 年表
4. 絵画 カテゴリー
  - 4-1 カテゴリー・制作展開
  - 4-2 〈TA〉、〈奇数連結〉、〈パーティカル〉、〈Qf〉
5. 絵画 レゾネM1~M431 1987-2010
6. フォーマートレゾネ M1~M431 1987-2010
7. 絵画 作品データ
8. テキスト 絵画をめぐる自筆文献
  - 8-1 画布のむこう側には
  - 8-2 断章
  - 8-3 Aki-No
  - 8-4 断章：素描をめぐる
  - 8-5 揺れる稜線のもとで
  - 8-6 肉体としての絵画—ドローイングに寄せて
  - 8-7 コメント
  - 8-8 絵画—降り続く雪の層に寄せて
  - 8-9 タイトルとして“ARTH・UR・S・SE・ATAR”
  - 8-10 “TA・SHOH-Qf・SHOH”〈絵〉／〈絵画〉に寄せて
  - 8-11 越後三山の稜線／鉄塔—横長フォーマートの窓
  - 8-12 「Qf・SHOH 150 〈掌〉」—回収と積合
  - 8-13 在ることの確かさ
  - 8-14 絵画／風景考 TA・KOHJINYAMAに寄せて
  - 8-15 「風景」「窓」「絵画」考
  - 8-16 循環する像 絵画作品／絵画のための見晴らし小屋
  - 8-17 青梅、そして〈TA・OHNITA〉に寄せて
  - 8-18 青梅3年あるいは7年
  - 8-19 〈TA・TARO〉風景からの視線
9. 対談「母袋俊也 絵画 マトリックス」林道郎×母袋俊也
  - 9-1 はじめに
  - 9-2 フォーマート意識の発生 障屏画／“TA”系—抽象表現主義との距離
  - 9-3 “奇数連結”から“Qf”系へ
  - 9-4 “TA”系—風景・横長フォーマート
  - 9-5 “TA”系—視線の固定／移動・時間性の発生
  - 9-6 フォーマート決定—展示空間
  - 9-7 フォーマリズム—手放された主題性・具体性 ヴェルフリン、グリーンバーグの系譜をたどって
  - 9-8 絵画—社会性・人間性／アイコン
  - 9-9 アイコンからの視線“Qf”系の空間性
  - 9-10 開かれた美術—ポピュリズムの落とし穴
  - 9-11 〈絵画〉／〈絵〉
  - 9-12 リアル—リアリティ  
リアリティがリアルを超える／シミュラクル
  - 9-13 リアリティ—膜状性
  - 9-14 絵と眼差しとの交感  
そこに期待するもの
  - 9-15 正しい絵
  - 9-16 色彩その有機性—現象—真理  
現象の中にこそ真理がある—ゲータ
  - 9-17 線的／絵画的—ヴェルフリン  
記号性
  - 9-18 主題性の回復としての“Qf”  
ポストモダン下における普遍性と多様性
  - 9-19 リヒターにおけるポストモダニティ
  - 9-20 ゲータ
10. 略歴
  - 10-1 個展
  - 10-2 グループ展
11. 自筆文献
  - 11-1 論文・書評
  - 11-2 研究論文
  - 11-3 エッセイ
12. 主要文献



本号の執筆者

浜島 敬 (はまじま・たかし) 東京造形大学教授  
井原浩子 (いはら・ひろこ) 東京造形大学教授  
大塚恵子 (おおつか・けいこ) 東京造形大学教授  
長谷川 章 (はせがわ・あきら) 東京造形大学教授  
母袋俊也 (もたい・としゃ) 東京造形大学教授

東京造形大学研究報

12

Journal of  
Tokyo Zokei University  
No.12  
2011

発行 2011年3月31日

編集

東京造形大学研究報編集委員会

編集委員長——長尾 信

編集委員——田窪麻周

大塚恵子

木下恵介

清水哲朗

玉田俊郎

発行

東京造形大学

192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556

Tel. 042-637-8111

Fax 042-637-8110

URL <http://www.zokei.ac.jp>



Tokyo Zokei Daigaku/

Tokyo Zokei University

1556, Utsunuki-machi Hachioji-shi,

Tokyo 192-0992, Japan

Telephone 042-637-8111

Facsimile 042-637-8110

URL <http://www.zokei.ac.jp>

制作・DTP / (株)風人社  
印刷・製本 / 造形美術印刷